

「性別」「地域」 による違い のデータ

高齢化は生活者の意識や好み、
価値観などの年齢による違いが
消えていくことでした。
では、視点を変えて
「性別」や「地域」による違いは
どう変化しているのでしょうか。
ここでは、「生活定点」や
その他の長期時系列調査から
関連するデータを紹介していきます。

性別 による

違いは消えているのか？

地域 による

違いは消えているのか？

性別による違いは、消えているのか？

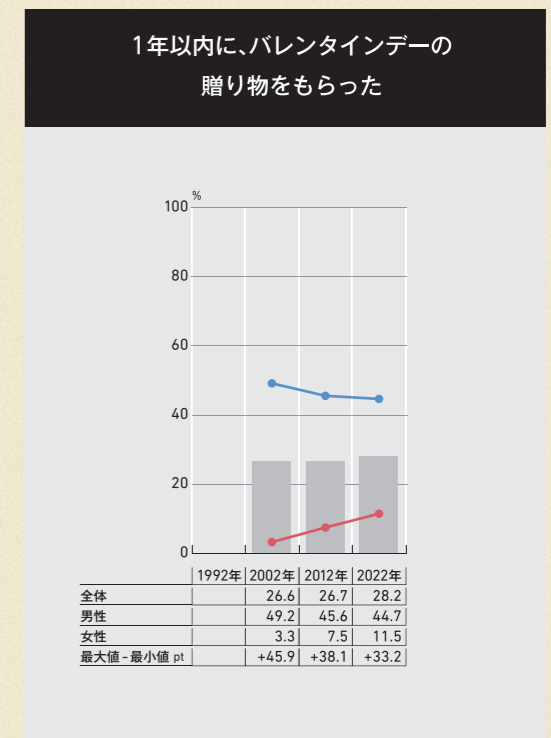
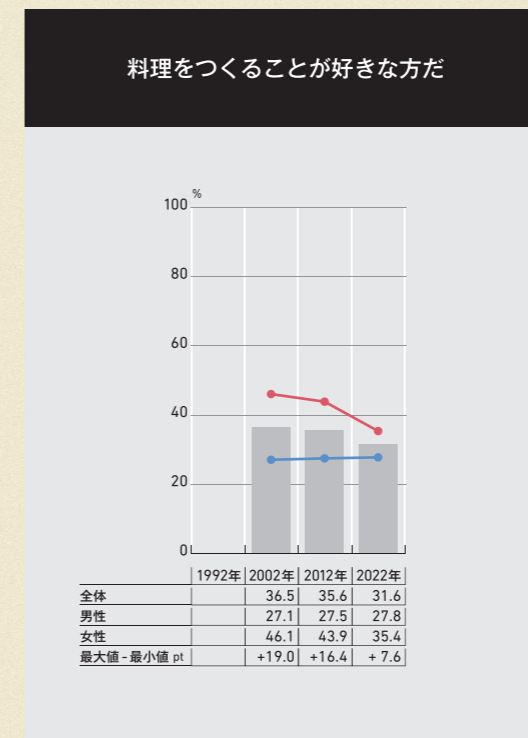
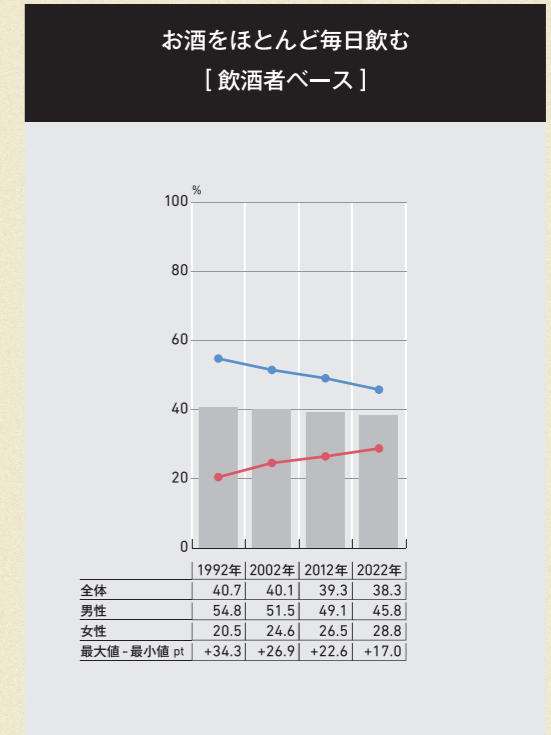
年齢ではなく、性別による生活者の好みや価値観の違いはどのように変化しているのでしょうか。「生活定点」の調査項目のなかで、男性と女性のスコアの差を現在と30年前や20年前とを比較したときに、10ポイント以上拡大または縮小した項目数をカウントしました。その結果、30年変化でも20年変化でも縮小した項目数が15個で、拡大した項目数よりも多いことが判明しました。ただし、縮小した項目数は年代別による検証時よりも少なくなっています。これは、年代別検証では20～60代までの5セグメントに細かく分けたので、最大値と最小値の差が大きくなりやすかったのに対し、性別では2セグメントのため、もともと差がつきにくい点が影響しています。参考までに、拡大/縮小の判定基準を5ポイントに緩和すると、性別による違いも20年変化では112項目まで増えました。いずれにしても、年代別ほどではありませんが、性別での違いも消えていく傾向にあることが確認できました。働く女性の増加やジェンダー平等の時流を考えると、当然の変化といえるかもしれません。

性別による違いも、縮小が拡大を上回る



性別による差が縮小した項目例

グラフ ● 男性 ● 女性 ■ 全体



地域による違いは、消えているのか？

例えば、方言が昔ほどきつなくなったり、地域色が薄まっているという話を耳にすることはないでしょうか。居住地域も生活者の属性のひとつであり、地域別の違いも縮小しているのかは重要な問いになります。

「生活定点」調査は首都圏と阪神圏のデータに限られるので、ここではほかの全国的な長期時系列調査を取りあげます。地域による違いを十分に多面的に捉えているとはいえませんが、ここでは、違いの縮小を示唆するデータを断片的にご紹介します。

食文化

食文化のひとつの例として、肉消費における牛豚鶏の構成比をみると、1963～1965年は都道府県ごとの特色がはっきりありました。対して2019～2021年ではその特色が消えていることがわかります。

ここには掲載していませんが、厚生労働省「国民健康・栄養調査」によれば、ひとりあたりの食塩摂取量も地域ブロック間の差が直近30年間ほどで縮小しています。食文化では、地域の違いが小さくなっている側面もありそうです。

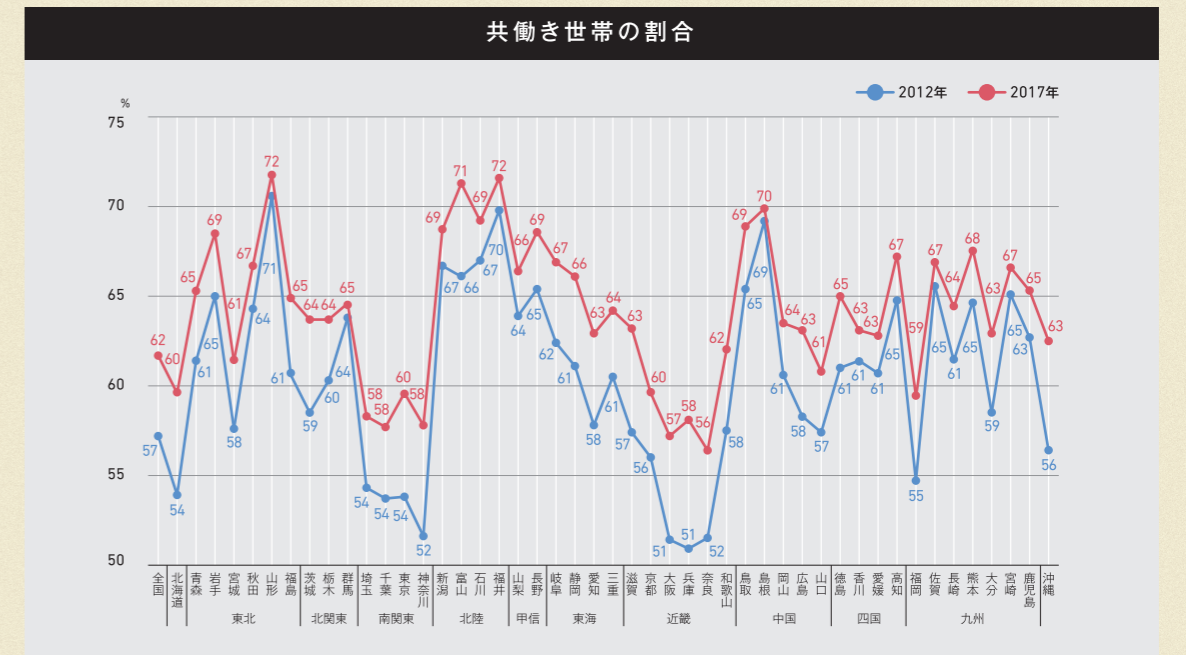


出典：総務省統計局「家計調査」(注)二人以上世帯の1世帯当たり品目別年間支出金額の割合。1963～1965年は返還前なので那覇市のデータなし

家計収入の担い手

日常生活における時間の使い方や家族関係を考える上で、その世帯が共働きなのか専業主婦なのかは大きな違いを生むはずです。では、その地域差はどう変化しているのでしょうか。

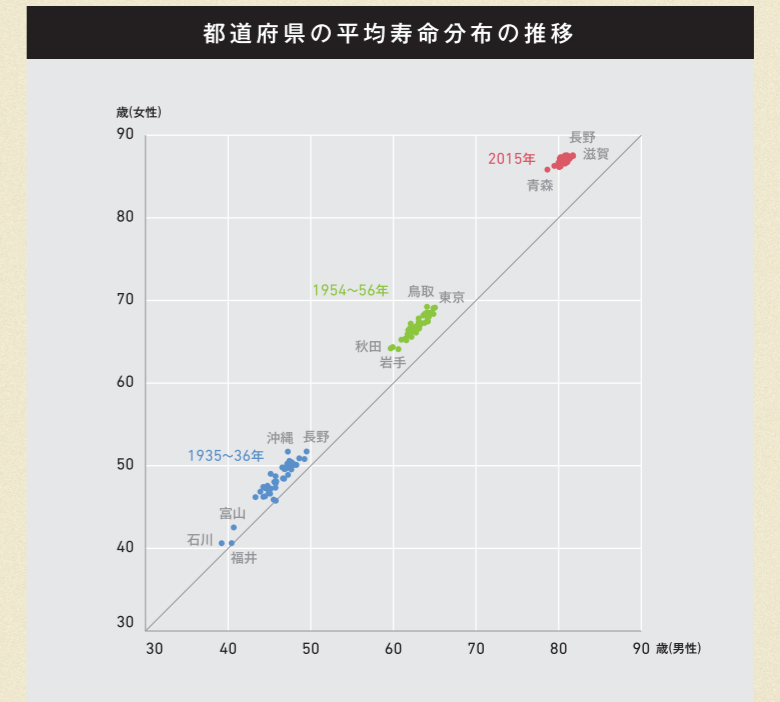
下のデータは都道府県別の共働き世帯の割合です。2012年段階で共働き率の低かった地域(北海道、南関東、大阪・兵庫・奈良、福岡など)ほど、2017年への伸びが大きい傾向にあり、差が平準化しています。昔から「かかあ天下」「九州男児」などと男女/夫婦の関係の地域性を語るがありますが、家計収入の担い手の面からみると、その地域差は小さくなっていることがうかがえます。



出典：総務省統計局「就業構造基本調査」「夫婦のみの世帯」「夫婦と親から成る世帯」「夫婦と子供から成る世帯」「夫婦、子供と親から成る世帯」の合計(ただし「夫婦ともに無業」を除く)のうち「夫婦共に有業」の世帯の比率

平均寿命

寿命の地域差をみてみましょう。横軸に男性の平均寿命、縦軸に女性の平均寿命をとり、都道府県ごとの数値を散布図にしました。1935～1936年では女性でみると最高の沖縄と最低の石川の間に11.1歳もの差がありました。しかし、直近の2015年では女性で最高の長野と最低の青森に1.7歳の差しかなくなり、平均寿命の地域差は時代を経るごとに小さくなっていることがわかります。



出典：1935～1936年と1954～1956年は水島治夫「府県別寿命表集」 2015年は厚生労働省「都道府県別寿命表」